夕刊讀賣新聞　（第3種郵便物認可）

世界史アップデート

中世西洋美術

ここに注目！

・11～12世紀のヨーロッパで広まった美術様式であるロマネスクは、石造りの素朴な建築が多く、古代ギリシャ・ローマやルネサンスに比べて稚拙な美術と評価されがちだったが、近年その創造性や革新性の再評価が進んでいる。
・12世紀以降に広まったゴシックは、かつて「野蛮」な美術とされたが、フランス革命などで多くの建物が破壊された影響で再評価され、現在の文化財保護につながる動きが生まれた。
・ゴシックの代表的建築であるパリ・ノートルダム大聖堂は、2019年に火災に見舞われた。修復の過程で石材同士を固定する「かすがい」として、創建当初から鉄が使われていたことなど新たな知見が得られている。

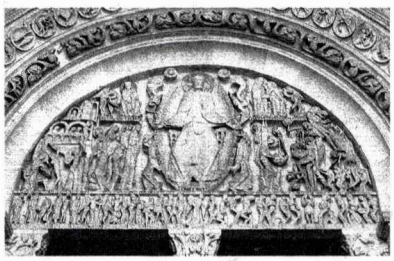
創造・革新性を再評価

西洋美術と言えば、端正な古代ギリシャ・ローマの彫刻や、ルネサンス以降の壮麗な絵画が象徴的だ。その間の5～15世紀頃は中世美術が栄えた時代だが、日本では美術展で紹介される機会も少なく、実像は詳しく知られていない。

11～12世紀を中心に広まったロマネスクは聖堂建築などに見られる中世美術の一様式だ。イタリア・ピサ大聖堂など有名な建築もあるが、厚い石壁と素朴な彫刻の建物が特徴と紹介されることが多く、前後の時代の美術に比べ稚拙との印象を持たれがちだ。「ロマネスク」の言葉は「ローマもどき」の意味もあり、その美術史的価値は長く過小評価されてきた。

ただ、近年はロマネスク美術の創造性や革新性を再評価する研究も進む。例えば翼と前足を持つ竜（ドラゴン）の装飾が聖堂建築に本格的に導入されたのはロマネスク期だ。北方ゲルマン世界の影響を受けたデザインとされ、多摩美術大の金沢百枝教授（西洋中世美術）は「古代ローマ伝統の石造りの建築に、荒々しい情動や生への情熱を表現した北方の要素が取り入れられたのがロマネスク美術の特徴だ」と話す。

こうした特徴を示す例にフランス・ブルゴーニュ地方のサン・ラザール大聖堂の扉口彫刻がある。「最後の審判」をモチーフにした彫刻は、限られたスペースにキリストや天使、悪魔などを隙間なく彫り、人の身体も不自然に曲がるなど構図のいびつさが指摘されてきた。ただ、ロマネスク期の壁画や刺繍（しゅう）にも同様の作風が見られ、不自由に見える構図にも彫り手の意図があったとする見方がある。


「最後の審判」を表したサン・ラザール大聖堂の扉口彫刻＝金沢教授提供

「枠組みがあることを逆手に取り、『最後の審判』の過酷さと重大さを表現した。日本の短歌や俳句と同様に、ロマネスク期の作家は枠の中で芸術性を高める表現を追究してきた」と、金沢教授は語る。

●

ロマネスク美術が誕生した1000年前後のヨーロッパは、バイキング襲撃などの動乱が落ち着き始め、社会が安定した時代とされる。温暖で農作物の収穫量も増加し、人口も増えた。新たな村に聖堂が次々と新築される「建築ブーム」の中で、古代ギリシャ・ローマ由来の文化的伝統に縛られない美術が誕生した。

金沢教授は「宮廷の限られた人が享受する文化から民衆文化への流れの中、知識より感情、写実より形の自由を優先する新たな表現が各地で一斉に花開いた時期」とロマネスクの時代を位置づける。ピカソも「表現力、力強さ、思い描いたものを明確に描く能力」を称賛したというロマネスク美術は、美の多様性が注目される今、改めて評価されるべき時代にきている。

セーヌ川の中州に立つノートルダム大聖堂では焼け落ちた尖塔などの修復が進められてきた（今年4月撮影）

の想像による怪物像も取り付け。その意匠の是非は20世紀以降も論され続けてきた。

●

ノートルダム大聖堂は2019年に火に見舞われた。焼け落ちた尖塔の建にあたり、フランス政府は当初、際コンペでデザインを選ぶとした、最終的に火災前の姿に戻す方針転換した。泉准教授は「デュクの塔も時を経てパリの象徴として評されるようになった。現存する中の美術・建築は19世紀の遺産でもる」と強調する。

今回の修復の過程では、石材同士固定する「かすがい」として、創建当初の12世紀から鉄が使われていたことが分かった。モルタルで接着させるより安定し、高層の建築を可能にする技術が確立していたことを示す新知見だ。美術品の修復には熟練工の卓越した技が生かされ、ドローンやCG（コンピューターグラフィックス）分析などの最新技術も駆使した修復が進み、今月8日には一般公開が再開される。

九州大の嶋崎礼助教（西洋建築史）は「ノートルダム大聖堂の修復は、その規模や重要性から『世紀の事業』であるだけでなく、最新のデジタルツールを駆使した次世代型修復工事としてのモデルケースになる」と評価する。（多可政史）

ート」では、研究成果を反映し
」と隔週で掲載する予定です。

参考文献　金沢百枝『ロマネスク美術革命』（新潮選書）、泉美知子『文化遺産としての中世』（三元社）、嶋崎礼「パリ・ノートル＝ダム大聖堂の周囲で起きていること」（白水社『ふらんす』2022年1月号）、ロバート・クンジグ「ノートルダム　再建への道のり」（『ナショナルジオグラフィック日本版』2022年2月号）